

## 1 自己評価及び外部評価結果

### 【事業所概要(事業所記入)】

事業所番号	4070000254		
法人名	社会福祉法人 育心会		
事業所名	グループホーム 白梅の里		
所在地	〒824-0205 福岡県京都郡みやこ町犀川久富1616番地 0930-42-0637		
自己評価作成日	平成27年07月28日	評価結果確定日	平成27年10月28日

事業所の基本情報は、公表センターページで閲覧してください。(このURLをクリック)

基本情報リンク先	<a href="http://www.kaigokensaku.jp/40/index.php">http://www.kaigokensaku.jp/40/index.php</a>
----------	---

### 【評価機関概要(評価機関記入)】

評価機関名	特定非営利活動法人 北九州シーダブル協会		
所在地	福岡県北九州市小倉北区真鶴2丁目5番27号 093-582-0294		
訪問調査日	平成27年10月13日		

### 【事業所が特に力を入れている点・アピールしたい点(事業所記入)】

恵まれた自然環境の中にあり、建物は昔懐かしい日本家屋、庭では梅や桜を鑑賞でき四季を感じることができます。その中で、職員は時間に追われる介護ではなく、ご利用者様とのコミュニケーションを大事にし、昼間はほとんどの方が居間で一緒にゆったりと過ごされます。一方、季節ごとのドライブやショッピングにはご利用者全員が参加できるよう支援し、時には外食を楽しんだり、また、ボランティアの方やエアロビのインストラクターを積極的に受け入れ、外部との関わりも大事にしています。防災については、高齢者に馴染み深い家屋ではありますが、木造のため、スプリンクラー・防火壁・自動火災報知設備を設置、夜勤職員に加え宿直員を置く、母体法人と連携を図る等、災害時の対応についても取り組みを重ねています。

### 【外部評価で確認した事業所の優れている点、工夫点(評価機関記入)】

「白梅の里」は、郊外の緑豊かな空気が美味しい自然環境の中に、民家を改築して17年前に開設した1ユニット(定員9人)のグループホームである。手入れの行き届いた日本庭園を眺めながら玄関を入ると、利用者と職員が、賑やかに楽しそうに談笑の様子が見られ、日に日に元気になる利用者を見守る家族からは、驚きと感謝の気持ちに包まれ、「ここを選んで良かった」と高い評価に結びついている。隔週毎の往診体制を確立し、主治医と看護師、介護職員が協力して、利用者の小さな変化も見逃さず、安心して任せられる医療連携が整っている。運営推進会議を活かして地域と信頼関係を築き、利用者と職員は、地域の一員として行事に参加し、ホームの行事にも地域のボランティアが参加し、相互交流が行われている。職員は介護のプロとしての意識も高く、生活リハビリを取り入れ、利用者の身体機能の維持を目指し、利用者の自信回復に繋がる介護サービスの提供に取り組んでいる「グループホーム 白梅の里」である。

### ・サービスの成果に関する項目(アウトカム項目) 項目 1~57で日頃の取り組みを自己点検したうえで、成果について自己評価します

項目	取り組みの成果 該当するものに印	項目	取り組みの成果 該当するものに印
58 職員は、利用者の思いや願い、暮らし方の意向を掴んでいる (参考項目:25.26.27)	1. ほぼ全ての利用者の 2. 利用者の2/3くらい 3. 利用者の1/3くらい 4. ほとんど掴んでいない	65 職員は、家族が困っていること、不安なこと、求めていることをよく聴いており、信頼関係ができている (参考項目:9,10,21)	1. ほぼ全ての家族と 2. 家族の2/3くらいと 3. 家族の1/3くらいと 4. ほとんどできていない
59 利用者と職員が、一緒にゆったりと過ごす場面がある (参考項目:20.40)	1. 毎日ある 2. 数日に1回程度ある 3. たまにある 4. ほとんどない	66 通いの場やグループホームに馴染みの人や地域の人々が訪ねて来ている (参考項目:2,22)	1. ほぼ毎日のように 2. 数日に1回程度 3. たまに 4. ほとんどない
60 利用者は、一人ひとりのペースで暮らしている (参考項目:40)	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	67 運営推進会議を通して、地域住民や地元の関係者とのつながりが広がったり深まり、事業所の理解者や応援者が増えている (参考項目:4)	1. 大いに増えている 2. 少しずつ増えている 3. あまり増えていない 4. 全くない
61 利用者は、職員が支援することで生き生きとした表情や姿がみられている (参考項目:38.39)	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	68 職員は、活き活きと働いている (参考項目:11,12)	1. ほぼ全ての職員が 2. 職員の2/3くらいが 3. 職員の1/3くらいが 4. ほとんどいない
62 利用者は、戸外の行きたいところへ出かけている (参考項目:51)	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	69 職員から見て、利用者はサービスにおおむね満足していると思う	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない
63 利用者は、健康管理や医療面、安全面で不安なく過ごせている (参考項目:32.33)	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	70 職員から見て、利用者の家族等はサービスにおおむね満足していると思う	1. ほぼ全ての家族等が 2. 家族等の2/3くらいが 3. 家族等の1/3くらいが 4. ほとんどできていない
64 利用者は、その時々々の状況や要望に応じた柔軟な支援により、安心して暮らしている (参考項目:30)	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない		

## 自己評価および外部評価結果

〔セル内の改行は、(Alt+)- + (Enter+)-です。〕

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
<b>理念に基づく運営</b>					
1	1	理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	法人理念を食堂に掲げ、職員全員が理解しそれに基づいて介護を行っている。	管理者を含めた職員の入れ替わりがあり、この機会に、改めて「理念」について話し合った。まずは、法人理念をしっかりと理解した上で、自分達がどういうグループホームにしたいのか、どういったグループホームを目指すのか、という職員一人ひとりの想いを出し合い、来年1月を目標に、ホーム独自の理念を作成する予定である。	
2	2	事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している	区長の協力で、毎年恒例の夕涼み会開催を回覧板で案内し、近所の子供たちとの交流の場を楽しんでいる。また、畑づくりでは苗・種を頂いたり、耕運を手伝って頂いたり等の協力がある。	区長から情報を得て、地域の伝統の祭りや産業祭に参加したり、ホームの夏祭りには地域住民の参加がある。各種ボランティアの来訪や保育園児との交流は、利用者の大きな楽しみである。ホーム裏の畑作りや草刈り、台風時の後片付け等、区長を始め、地域の方の大きな協力があり、開設17年目を迎え、地域との繋がりは深い。	
3		事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	自治区会に加入し、地域の方々と交流のできる、開かれた施設を目指している。		
4	3	運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	ご利用者が参加できるよう、またご利用者の日頃の様子ができるように会議は居間で開くようにしている。議事録についてはなるべく詳細に記録し、家族全員へ送付、情報を共有できるようにしている。	利用者、家族、地域代表、介護相談員、町役場担当者、地域包括支援センター職員参加の下、2ヶ月毎に開催し、ホームの運営や取り組み、課題について報告し、参加委員からは、質問や意見、情報提供を受け、それらをサービスの向上に活かしている。緊急連絡網や宿直体制、園芸療法について等、熱心に意見交換を行っている。	
5	4	市町村との連携 市町村担当者や日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くように取り組んでいる	運営推進会議には、役場担当者及び地域包括支援センター職員に出席して頂き、また、毎月介護相談員の訪問を受けて意見交換をする。管理者は、事業者協議会やグループホーム連絡協議会に参加し、情報の共有を図っている。	行政窓口へは、疑問点、困難事例の相談や事故報告を行い、連携を図っている。運営推進会議に、行政や地域包括支援センター職員が出席し、ホームの現状を伝え、アドバイスや情報提供を受けている。また、グループホーム連絡協議会に参加し、情報の共有を図り、協力関係を築いている。	
6	5	身体拘束をしないケアの実践 代表者および全ての職員が「介護指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	家族の要望もあり、やむなく車椅子上の安全ベルトをしている事例もあるが、日々の観察やモニタリングにより職員全員が廃止に向けて取り組んでいる。	「出来るだけ安全に」という家族の要望を受け、転倒、骨折防御のため、時間を決めて車椅子のベルトを使用している。職員の身体拘束廃止に向けての意識は高く、習慣化することなく常に観察を行い、検討しながら身体拘束をしないケアに向けて取り組んでいる。また、日中は玄関を開放し、職員の見守りの中、利用者は自由に出入りしている。	
7		虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見過ごされることがないように注意を払い、防止に努めている	職員全員が虐待についての理解を深め、防止するよう努めている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
8	6	権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	成年後見制度を利用されている方も入居されており、関係機関との連携を図っている。運営推進会議において地域福祉権利擁護事業を議題に取り上げたこともあり、資料を整備している。	現在、成年後見制度を活用の利用者がいるため、関係機関とのやり取りの中で制度についての理解を深めている。以前、行政主催の研修に参加したり、運営推進会議の中で取り上げた事もあり、制度に関する資料やパンフレットを用意し、必要時には、関係機関と連携し、制度を活用できるよう支援している。	
9		契約に関する説明と納得 契約の締結、解約又は改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	契約の際は必ず立会人を置き、十分な説明のうえで契約の締結を行っている。料金や体制の変更の際も事前に文書を送付し、理解を得るようにしている。		
10	7	運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	運営推進会議の案内・議事録を全家族に送付し、意見や要望を聞く機会にしている。また、季刊誌の発行やご利用者の近況報告書で施設での様子を家族に伝えている。	日常の暮らしの中で、職員は利用者寄り添い、利用者の発した言葉を大切に書き留め、情報を共有して、介護サービスに反映させている。家族の面会時や運営推進会議、行事への参加時、または、電話で家族とのコミュニケーションに努め、意見や要望を聴き取り、介護計画に反映させている。また、季刊紙や近況報告書で、利用者の暮らしぶりを伝え、信頼関係に繋げている。	利用者、家族、外部の方等の要望、意見、苦情収集の為、わかりやすい場所に意見箱を設置し、苦情や意見は宝である事を周知し、更に開かれたホームを目指す取り組みを期待したい。
11	8	運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	月に一度、職員全員参加の職員会議を開き、意見の交換や提案を聞く機会にしている。	毎月1回、夜勤入り明け以外全職員出席の下、職員会議を開催し、言いやすい雰囲気の中で、意見や要望、提案がたくさん出され、有意義な会議になっている。浴槽のマットやシャワーチェアへの購入、畑を含めたホーム周辺の整備についての提案等があり、出来る事から取り組みを始めている。	
12		就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	常勤職員には人事考課制度を取り入れている。また、非常勤職員に対してもケアマネや介護福祉士等の資格によって、賃金アップにつなげている。		
13	9	人権尊重 法人代表者及び管理者は、職員の募集・採用にあたっては性別や年齢等を理由に採用対象から排除しないようにしている。また、事業所で働く職員についても、その能力を発揮して生き生きとして勤務し、社会参加や自己実現の権利が十分に保証されるよう配慮している	職員の採用にあたって、年齢や性別による制限は行わず、定年後も希望があれば再雇用が可能である。	法人としての採用を行い、年齢、性別による制限はない。今回、管理者の交代と職員の入れ替わりがあったが、人柄の良い職員が集まり、皆で管理者を支えながら、チームワークを発揮して、この困難を乗り越えようと努力している。職員の特技を活かした役割分担や家庭環境に配慮した勤務体制とする事で、職員が、生き生きと仕事に取り組む事が出来る環境を整えている。	
14	10	人権教育・啓発活動 法人代表及び管理者は、入居者に対する人権を尊重するために、職員等に対する人権教育、啓発活動に取り組んでいる	法人全体での研修を行い、職員教育に努めている。	利用者の尊厳や権利を守る支援の在り方を、法人全体の研修で学び、利用者への言葉かけや対応については、常に人権の尊重を意識して行うよう努めている。また、法人の理念、基本方針を基に、利用者一人ひとりを大切に介護サービスに取り組んでいる。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
15		職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	福岡県社会福祉協議会主催の研修会にはなるべく出席するよう努め、研修後はレポートをまとめ職員会議等で発表し、他の職員へも周知するようにしている。		
16		同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	グループホーム連絡協議会に参加し、お互いにサービスの質を向上するべく情報の交換を行っている。		
<b>安心と信頼に向けた関係づくりと支援</b>					
17		初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	契約前に面接を行い、本人と話を交わす中で、要望や不安を理解し対応できるよう努力している。		
18		初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	契約前に家族とも話し合いを行い、具体的な要望や疑問点・不安な点を尋ね、協力体制がとれるよう努力している。		
19		初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	入居申し込みを受けた時は、ケアプランサービス職員や特養相談員とも話し合いの上、必要とする支援を提供できるよう努めている。		
20		本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	介護度が高くなるに伴い、日常生活動作が難しくなったご利用者もいるが、洗濯物たたみ等の簡単なことは手伝って頂いたり、料理教室を開いて協力して昼食を作ったりしている。		
21		本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	外出時の援助や一時帰省等家族に協力して頂いている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
22	11	馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	地域の敬老会への参加や神幸祭の見物、みやこ町の花の名所を訪ねる等の支援をしている。	数人の利用者には、友人や以前入会していた老人会の方が訪ねて来て、旧交を温めている。地域の敬老会への参加、地元の祭り見物等、馴染みの人や場所との関係が途切れないよう支援している。また、入居後の利用者同士の強い馴染みの関わりも見られ、職員が間に入って調整等行いながら支援に努めている。	
23		利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せず利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	日中は居間に集まっていたり、行事のときのビデオをテレビで流したりして、ご利用者同士の会話が弾むよう努めている。		
24		関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	ご利用者の状況によっては、特養への入居手続きを援助する等、退所後の方向性を決める支援をしている。		
<b>その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント</b>					
25	12	思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	職員個々の視点での気づきを共有しながら、ケアマネによるご利用者または家族の意向の確認に努めている。	新しい職員が多いが、職員全員が積極的に利用者に寄り添い、それぞれが情報を沢山持って、常に話し合いながら情報を共有し、利用者の思いや意向に沿った支援となるよう努力している。また、ケアマネージャーとして長く関わりのある管理者は、「この方の流れはこうだった」と、職員に伝えながら、その方の思いに沿った介護サービスを目指し取り組んでいる。	
26		これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	在宅時の担当ケアマネと連携を図り、生活歴の把握に努めている。		
27		暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	個々の生活状況はケース記録に残し、必要に応じて職員で話し合い、状況把握に努めている。		
28	13	チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	ケア会議では医療関係者や家族の意見も参考にしながら、介護計画を作成するよう努めている。	「介護計画をきちんとすれば家族の意見は反映される」との思いで、利用者、家族の意見、要望を聴き取り、カンファレンスや毎月のモニタリングの中で検討し、利用者本位の介護計画を6ヶ月毎に作成している。また、介護計画の実施状況や目標達成状況を確認し、それらを踏まえて、介護計画の見直しを行っている。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
29		個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	ケース記録や業務日誌により、個別の現状を共有し、また、毎月のモニタリングをもとに、見直しの必要性を検討している。		
30		一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	戸外での作業を好まれる男性入居者に畑づくりや作物の収穫を手伝っていただいたり、外出の好きな方には個別に支援したりしている。		
31		地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	園芸療法を通して、地域の方にもボランティアをお願いしたり、気軽に施設を訪問できるよう呼びかけをしている。		
32	14	かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切に、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	基本的に看護職員が受診に同行し、医師や家族との情報共有に努めている。特養との連携を図りながら、適切な医療を受けられるよう支援を行っている。	契約時に、利用者や家族の希望を聴いて主治医を決めている。家族の通院支援の対応について尋ねると、ほとんどの方がホームの協力医に変更している。現在は、全員がホーム協力医が主治医であり、受診にはホーム看護師が同行し、月2回の往診と合わせ、適切な医療を受けられるよう支援している。	
33		看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	介護職と看護職が個々の気づきを共有できるような関係づくりを努めている。		
34		入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている。	入院中は管理者または看護師がお見舞いに行き、現状把握に努め、病院関係者との情報交換をしている。退院後の対応についても、主治医や家族と話し合っている。		
35	15	重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所のできることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	入居時に、事業所としての方針を説明し、基本的には医療関係や同法人の特養施設との連携による重度化への支援について納得してもらっている。	契約時に、利用者、家族に対して、重度化に向けたホームの方針を説明している。利用者の重度化に伴い、車椅子に対応出来るように、畳敷きだった居間をフローリングに改装する等、出来るだけホームで長く暮らせるよう支援している。医療機関や法人内特養と連携し、利用者や族が安心して終末期ケアを受けられるよう取り組んでいる。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
36		急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	マニュアルは作成しているが、定期的な訓練までには至っていない。		
37	16	災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	年6回、災害の内容等を変更し避難訓練を実施している。そのうち1回は消防署の立会いで実施し、注意点等指導して頂いている。防火安全対策としてスプリンクラー・防火壁・自動火災報知設備を設置。区長を通して地域住民への協力もお願いしている。	2ヶ月毎に避難訓練を実施し、内1回は消防署の参加を得て行っている。夜間想定を重点的に行ない、同法人特養との連携も確認している。自動送信システムによる緊急連絡網の整備や宿直者を置いて、夜間も安心な体制を整える等、防火安全対策に熱心に取り組んでいる。また、地域の方に見守りをお願いし協力を得ている。非常食としてお粥やインスタントラーメンを準備している。	
<b>その人らしい暮らしを続けるための日々の支援</b>					
38	17	一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	職員一人一人が家族の一員としての心がけで信頼関係を築けるよう努めている。	共同生活の中での利用者一人ひとりのプライバシーの確保を意識し、支援している。特に、排泄や入浴、居室の掃除等では、利用者の自尊心に配慮した支援を行っている。また、利用者の個人情報の記録の取り扱いや、職員の守秘義務についても、管理者が日常的に注意し、周知されている。	
39		利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	ケアマネが、ご利用者一人一人が思いを伝えられるよう働きかけている。		
40		日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切に、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	個人の時間の流れを大切に、自由に過ごして頂けるよう、細かなスケジュールは作らないようにしている。		
41		身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	美容室の方に来て頂いて、髪をカットしたり、自分で洋服を選んで着たりできるよう言葉かけをしている。		
42	18	食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員が一緒に準備や食事、片付けをしている	敷地内の梅を漬けたり、畑で収穫した野菜で漬物を作ったり「食」の楽しみを感じて頂けるよう支援している。	食材を業者から仕入れ、ホームの台所で食事を作って提供している。利用者に人気がないと思われるメニューの時には、ホームでメニューを変更して料理する等、臨機応変に対応している。おやつに、たこ焼きを焼いたり、料理教室と称して、お好み焼き、スープ、おにぎりを作る等、食べる事を楽しめるよう支援している。また、職員は持参した食事を持って、利用者の方に座り、賑やかな食事の時間である。	月に1回、職員会議の時に職員全員で検食を行っているが、毎日の取り組みとして、職員が1名ずつ交代で検食を実施し、感想や意見、要望を記録して業者に伝え、より美味しい食事の提供に向けての取り組みを期待したい。

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
43		栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	一日の食量や水分量が一目でわかるようチェック表を作成し、足りなければ、看護師が家族へ嗜好品を用意して頂く等の配慮をしている。		
44		口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	個人に応じ、歯ブラシが使えない方には口腔ケアスポンジを用意する等、ケアをしている。		
45	19	排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	排泄チェック表を作成し、個別の状況やパターンの把握に努めさりげない声掛けや対応で、出来るだけ自分で排泄できるようトイレ誘導を行っている。	トイレで排泄することを基本とし、職員は、利用者の排泄パターンを把握し、表情や仕草から察知して、早めの声掛けや誘導を行っている。また職員は、オムツを使用しない暮らしが、利用者の生きる意欲に繋がることを意識して、排泄の自立に向けた支援に取り組んでいる。	
46		便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	排便チェックを行い、ヨガのインストラクターの受入等、一緒に運動する時間をつくっている。		
47	20	入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めてしまわずに、個々にそった支援をしている	毎日入浴準備を行い、希望や体調に応じて、柔軟に対応できるように配慮している。また、季節により柚子湯にしたり、入浴を楽しめるように支援している。	毎日入浴出来るよう準備し、利用者の希望や状態に合わせた入浴の支援を行っている。柚子湯や菘蒲湯等で季節を感じてもらい、入浴を楽しめるよう配慮している。浴槽の下に敷く滑り留めマット、シャワーチェア、手すりの設置により、重度化の利用者も安全にゆっくりと浴槽に浸かる事ができ、入浴を楽しんでいる。	
48		安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	自分のペースで休息できている。		
49		服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	看護師により服薬チェックを行い、状態に変化があればその都度主治医と相談しながら対応している。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
50		役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	洗濯物の整理や掃除の手伝い、配膳等、できる範囲での役割がある。家族の協力を得て、外出・外泊を行い、気分転換を図っている。		
51	2.1	日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している	少しずつ重度化へと移行する中で、家族との連携も活かしながら、個別の外出支援に努めている。また、所要の際には同行したりしてドライブを楽しんで頂いている。	重度化が進み、全員での外出が難しい中で、個別や少人数での散歩や買い物、花見、ドライブ等に出かけ、利用者の気分転換に繋げている。食材を法人本部に取りに行く時に同行してもらったり、「秋桜が綺麗に咲いてますよ、その辺まで見に行きましようか。」と声掛けして出かける等、日常的に戸外へ出かけられるよう支援に努めている。	
52		お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	ショッピングの際には、自由に自分の好きなものを買えるように支援している。		
53		電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	電話や手紙のやり取りはできていない。		
54	2.2	居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	日本家屋でその木の風合いを大切に、居間には仏壇を置くなどして施設的な雰囲気にならないよう配慮している。	格子戸をくぐると、白梅の咲く庭に面した古民家改造型のホームが建っている。居間には、仏壇や神棚が置かれ、金木犀やコスモスの花が飾られている。ソファに座って会話を楽しむ仲の良い利用者や、ダイニングで遅めの朝食を摂ったり、居室でゆっくり過ごす利用者等、それぞれが、居心地良く過ごす事の出来る「我が家」となっている。	
55		共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	居間ではお互いに気の合う者同士、隣り合わせに座っておしゃべりを楽しんでいる。		
56	2.3	居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	家族と協力しながら、馴染みの品を持ってきて頂く、また状態によって畳敷きの部屋がベッドを使用かに変更できるようにしている。	畳の部屋やフローリング、広さもまちまちの居室には、それぞれの馴染みの家具や大切な物を、家族の協力で持ち込んで貰い、その方らしい部屋作りを心掛け、利用者が安心して過ごせるよう配慮している。また、掃除、換気をこまめに行い、風が通って気持ちの良い居室である。	
57		一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	居室に表札をかけたたり、トイレの場所をわかりやすいように工夫している。		